

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanekiru Kōketsuno
3

目次

本編
7

番外編 苦勞人奴隸貴族の過ごし方
243

モンスター大図録
Vol.2
(ゴブ爺&赤髪ショート監修)
269

姉妹さん(妹)

裁縫と料理が得意。
貧乳で左目にほくろがある。

姉妹さん(姉)

裁縫と料理が得意。
巨乳で右目にほくろがある。

赤髪ショート

赤髪で子犬のような
可愛い系の女の子。
新米冒険者だったが、
窮地を救ってくれた
オガ朗の仲間になる。

鍛冶師さん

ほんわかとした雰囲気を持
つ癒し系。
武器・道具作りが得意。

錬金術師さん

知的なクール系美人。
錬金術を操り、マジックア
イテムを作ることができる。

お転婆姫

誘拐されたところをオガ朗に
助けられた、シュテルンベル
ト王国の王女。
線の細い見た目に反して、
性格は相当わがまま。

少年騎士

お転婆姫につき従い、
振り回される苦勞人。
一途な頑張り屋。

ダム美

オガ朗と共に生まれ育った
ゴブリン仲間。
現在は【氷原の神の加護】
を所持する美しき
半吸血鬼・亜種に
【存在進化】している。

オガ朗

ゴブリンに転生した主人公。
アップブレイク
【吸喰能力】によって、
喰えば喰うほど強くなる。
現在は^{イース}大鬼・希少種に
ランクアップ
【存在進化】している。



《九十六日目》

俺ことオガ朗とダム美ちゃん、更に赤髪^{あかがみ}ショート達人間五名、鬼人^{ロイド}三名のグループは、昨日の昼に生まれ育った《クーデルン大森林》を出発した。

乗っているのは、ブラックスケルトンの骨から造った骸骨^{がくつむか}百足。そのままと目立ち過ぎる為、自走する幌馬車^{ほろばしや}風になっている。これでも目立つが、まだマシ……だろうか？

振動が少なくてかなり快適な乗り心地だ。しかも休む事なく移動可能なので、寄り道せずに走らせていれば、既に目的地である防衛都市《トリエント》に続く街道に到着していたかもしれない。が、実際は訳あって途中の草原にある村で一夜を過ごす事にした。

その村は《クルート》と呼ばれ、人口は約三百人ほど。一応農業もしているが最低限度のモノでしかない。《クーデルン大森林》で採れる良質な木材を使って一風変わった楽器などを製造・販売し、それを主な収入源としているのだそうだ。ベルベットのダンジョンに集まっていた精霊の存在が作

用してか、精霊の力の名残りがある古木が生えているらしく、それが楽器作りに適しているのだという。

実際楽器を見せてもらったが、確かに見事なモノだった。精霊の力が宿る音色は、聞く者の心に安らぎを与えるようだ。金持ちが一種のステータスとして購入しているという話も頷ける。これなら【吟遊詩人】など楽器を使う職業持ちも、こぞって買い求める事だろう。

本来こは、周囲の草原のように何も無い場所だったらしい。だが、良質な材木を求めて腕に自信のある職人が集まり、次第に村として形成されていったのだ。この村で作られる製品はそこかしこで評価を得ているそうなので、順調にいけば更に人が集まり、規模はもっと大きくなるはずだ。

顧客である貴族の取り計らいで村の警護を担当するのは、人造魔法生物【守人】。早い話が、鉄のゴーレムである。実力はホブゴブリン以上オーガ未満とそこまで強くはないが、耐久値は非常に高い。それが五体ほど居るのに加えて、物見やぐらに壕、木壁なども設置されていた。

赤髪ショート達が言うには、安全度という意味でこの世界ではかなり恵まれた環境にある村の一つだそう。

そんな警備のしつかりした村なので、俺がオーガであるが故の一悶着もあったがそれは省略する。ちなみに村に入る前に、黒い体表はベルベットの遺産の一つである【変身の腕輪】によって、目立たないように普通のオーガと同じ茶色に変えておいた。便利なので後ほどこのリングを喰ってアビ

リティを得ようと思う。

普段ならこの程度の村は、挨拶をし、分体を埋め込んで通信機能を持たせた名刺ならぬ名鉄を渡すだけで去っていた事だろう。

そうしなかったのは、この村に最近一つの問題が発生し、村人達が困っていたからだ。

問題というのは、次の通り。

この村は、十年ほど前にできて以来、半年に一度、女の奴隷、あるいは食料や武器などを森に棲むオークの氏族に献上していた。そうする事でオーク達が森のモンスター達から守ってくれ、安全な環境下で木材を得られていたそう。

しかしながら最近オーク達が契約を守らず、それどころか伐採中に襲ってくるようになり、弟子の若い娘が三人ほど攫われてしまったという。更には村にも何度か襲撃があったらしい。

【守人】がオークに負ける事は無かったが、如何せん相手が多過ぎたそう。たった五体の【守人】だけでは村全体をカバーできず、村人達も武器を持って村を守る為に戦い始めた。

まだ死者こそ出ていないが、怪我人は続出し、畑は荒らされ、木材も安全に得られなくなった。ずっと友好的だったオークが何故このような蛮行を、と村人は戸惑い、やはりオークもモンスターではないのか、というやるせない思いを抱いたそう。

まだ木材に余裕はあるが、この状況が続くと納品にも差し支える。このまま客足が遠のけば、村

が寂れ、最悪、廃村と成り果ててしまう。

歴史が浅く、殆どの村人にとっては生まれ故郷という訳ではない。それでも開拓当初から十年も暮らしてきた場所とあって、古参の職人達はこの村に愛着を感じていた。廃村になるのは悔しいし、職が無くなるのも避けたいと思うのは当然の事だろう。

結局村人の間では、このまま村が廃れてしまいうくらいなら、大金を出してでもオークの討伐を《総合統括機関》に依頼しよう、といったところまで話が進んでいたそう。

しかし実は、うん、この危機的状況の根本的な原因は俺達にある。

俺達の本拠地は、かつてオーク達が支配していた採掘場だった。俺達はオークを殺して、そこを奪った。生き残ったのは、その時採掘場にいなかったオーク達だ。

話を聞いてさっそく、俺の血で造った分体を走らせてそいつらを調べた結果、生き残りはあまり知恵の無いオークだけだと分かった。この村を襲撃した際、【守人】や村人などによって何体か殺されはしたが、まだ三十体ほどが生存しているようだ。

群れの頭脳だったリーダーやメイジが俺達に殺された事で、役割分担が機能しなくなり、食料配分も乱れたのだろう。無計画な暴食によって食料不足が深刻化した、といったところか。

オークは力こそ強いが、気配を消すなどの技能は拙い。気配に敏感な動物やモンスターを相手に、

集落の全員が飢えないだけの獲物を狩るのは困難を極めたに違いない。

分体を通じて見たオーク達は、だいぶ痩せていた。碌なモノを喰えていないのだろう。

そんな感じで切羽詰まったオーク達は、とにかく生きる為に人間から略奪をするようになった。その方が森での狩りよりも遥かに楽だからだ。

とまあ、確かに原因は俺達に、特に俺にある。

俺も、見ず知らずの村人を巻き込んだまま問題を放置するのは忍びない。それに、と言うかコッチが本音なのだが、恐らくギルドに依頼が出されれば、俺達の拠点の現状が外に漏れる可能性がある。オークの採掘場から発掘された精霊石はたまにこの村にも卸されていたらしく、人間達は討伐ついでに精霊石の出所を探索するだろうからだ。

精霊石は貴重だ。売れば莫大な金になるし、上質なマジックアイテムの素材としても需要がある。そんな金の成る木を、人間が見逃すとは到底思えない。今までは村とオークとの間で契約があったから、村人達もそうした情報を秘匿していたそうだが、それももはや過去の話だ。

何としても、洞窟を見つけられるのだけは避けたい。拠点はまだまだ要塞化計画の途中なのだ。という訳で、俺は村長と話し合い、オーク達に代わって森での安全を保障する契約を交わした。そうこうしているうちに日が暮れた為、一泊したのである。

オークと同じくいずれ裏切るのではないか、と疑われたが、そこは赤髪ショート達が説得してくれた。やはりこういった時に、同族の言葉は拔群の効果がある。まあ、無料で怪我人の治療をした事も要因の一つではあるだろう。

とにかく、クルート村との契約は成された。一応現段階では仮の短期契約とし、様子を見て正式な長期契約を結ぶ、という話で片が付いた。これまで通り精霊石の出所を探索をしてはならないという約束もしたので、取りあえず洞窟の件も大丈夫だろう。約束を破れば村はどうなるか保証できない、としっかり脅しておいた。

報酬などではだいぶ譲歩しているし、これくらいは良いだろうさ。

翌朝、朝食を貰い、俺達は村を出立した。

去り際、村長からオークに対する不安がまだ見てとれた為、大丈夫だと言っておいた。

実は契約が成された時点——つまり昨日の夕方くらいだ——で拠点の待機組に指令を飛ばしておいたのだ。その数時間後には生存していたオーク達の全てが焼き豚となっていたので、既に問題は解決している。

オーク程度の奴隷など今更必要ないからしっかし殺させた。喰うと結構美味いオークの肉は、待機組の精力増強になった事だろう。

ちなみに攫われたという三名の弟子の女性も保護したので、今日の昼頃に村へ連れて来いと命じておいた。俺が以前【性欲豚】と言ったように、やはりアッチ方面はまさに底なしで、娘達は結構汚されていたらしい。

あと、オークに献上されて生き残っていた女奴隷数名はコチラで引き取る事にした。彼女らにとっても、これまでより生活環境はいいと思う。

幸先はまあまあ良い、と言えるだろう。信頼は、少しずつ勝ち取っていけばいい。

そんなこんなで、骸骨馬車に揺られながら変身の腕輪を喰いました。

「能力名【変身】のラーニング完了」

取りあえず、体だけの変色させておこう。赤い刺青はそのままだが。

《九十七日目》

都市に直行するのは止め、じっくり周囲の地形を調べたり、モンスターを喰ったりするのに力を注ぐ事にした。

現在地は、草原を抜けた先にある丘陵地^{きゆうりやうち}。ココには以前草原でも出合った人面牛のようなバイコーンに加え――

サイとバツファローとイノシシを混ぜ合わせたような見た目で四メートルほどの大きさがある『ボルフォル』

二メートルほどの蛇の胴体の中心部に三〇センチほどの赤い亀の甲羅を付けたような『ダートルスネーク』

額^{ひたい}から二〇センチほどの鋭い刃を生やしたホーンラビットの上位種らしき『ブレードラビット』

人間の腕と足を鳥に変えたような『ハーピー』

――など、今まで遭遇した事の無い種族が多くいるようだ。

喰えばきつと新しいアビリティを得られるだろう。楽しみである。

ただ、森のように隠れられる場所は多くない。ココで死角から近づいて奇襲^{きしゅう}するのは、俺やダム美ちゃんなら兎^とも角^{かく}、赤髪シヨートには難しいだろう。

なので、狩りの際は俺とダム美ちゃんの魔術で先制攻撃を仕掛けて標的^{ひき}を怯^{ひる}ませ、その隙に赤髪シヨートと共に『鬼熊^{オニクマ}』のクマ次郎^{じろう}に跨^{また}って接近する事にした。ちなみにダム美ちゃんの

『使い魔^{ツミ}』であるトリプルホーンホースは拠点に残してきたので、彼女は『オルトロス』のクロス郎^{さぶろう}に跨^{また}っている。

全て俺一人で終わらせてしまうと皆に経験値が入らないから、こうするのが一番良かったのだ。しかし、ダム美ちゃんが赤髪シヨートを羨^{うらや}ましそうに見ていたのは何故だろうか。

最初の獲物は、ボルフォルの群れだった。数は十頭。一頭は捕らえて、『使い魔』にして骸骨百足を牽引^{けんいん}させようと決めた。と言うのも、村に立ち寄った時にやはりその見た目で驚かれた為、もう少しマトモな馬車に見えるようカモフラージュしたかったのだ。クマ次郎は有事の際には騎獣として使えるし、クロ三郎は遊撃手として有能だ、こいつらはなるべく自由に戦わせた方がいい。そう考えると、この役目にはボルフォルがうってつけだった。

ボルフォル狩りは無事に成功。

赤髪シヨート達に聞いたところ、ボルフォルの角は薬の素材として高額で売れるらしく、遠慮なく剥ぎ取った。肉も売れるそうだが、取りあえず俺の朝飯として五頭ほど喰いました。

『能力名【粉骨犀身^{チヤージライセラス}】のラーニング完了』

『能力名【知覚鈍麻^{ちかくどんま}】のラーニング完了』

量はそこそこあった割に、得られたアビリティは二つだけだった。まあ、こんなモノだろう。二

つとも有用そうなので、特に不満も無い。

と言うか、味が極上過ぎて不満などあるはずもない。焼き肉にしたのだが、口に入れた瞬間溶けるような食感、広がる旨味……堪らん。グロい見た目に反してこの美味さ、思わず詐欺だろう！と言ったのも仕方がないと思うのだ。

ボルフォル肉マジウマー、と吼えたのも当然だね。

食事中も分体を走らせ、脳内地図を埋めていくのを欠かさない。その後は《使い魔》にしたボルフォルが牽引できるように骸骨百足の形を変えてから先を進んでいく。

しばらくすると、ブレードラビットを見つけた。森にいたホーンラビットよりも大きく、より鋭い武器を額に持っているのが特徴だ。といっても、俺やダム美ちゃんなら軽く踏み潰せる雑魚なので、赤髪ショートに狩らせる事にした。

俺はその様子を、鍛冶師さん達と一緒に、森の父親エルフから貰った紅茶を飲みながら見守る。

ブレードラビットは案外素早いようだ。赤髪ショートが惨殺してきたアカシカなどよりも、短距離においては速く動ける。その速度と奇妙な軌道の動きに翻弄され、交錯する度、赤髪ショートの四肢に小さな傷がつけられていく。

姉妹さん達から小さな悲鳴が上がるが、当の赤髪ショートは焦る事無くブレードラビットを観察していた。確かに苦戦しているが、どれも掠り傷でしかない。日々の訓練の成果だろう。

一分ほどでブレードラビットのスピードに慣れた赤髪ショートが、狙いを定めてグルカナイフを振り下ろす。それは相手の頸部を正確に捉え、肉も頸椎も纏めて切り裂いた。

ゴロリと転がった頭部と胴体を拾い、赤髪ショートがコチラを振り返る。俺が頷くと、赤髪ショートはその死体を喰い出した。生で、である。額のブレードを、煎餅のように軽く噛み砕いていく。ボタボタと溢れる鮮血が、赤髪ショートの口や革鎧を赤く染めていった。

それを見て、クールな錬金術師さんすらも息を呑んだのが分かった。

俺は、『アレは赤髪ショートの【職業・魔喰の戦士】による副作用を抑制する為にも必要な行為の一つで、病気になる事は無いから大丈夫だ』と教えてやったのだが、『いや、そうじゃなくて……』と呆れられ、クスクスと笑われてしまった。

何故だ。

まあ、良い。『ブレードラビットを喰べて能力値が上がった』と喜んでいる赤髪ショートの頭を撫でて癒されたので、気にしない。

ちなみに革鎧に付着していた大量の血は、俺が【水流操作能力】を使って跡形も無く綺麗に吸い取ってやった。

昼になって、タートルスネークの住処を発見した。どうやらタートルスネークは、蟻などのように地面を掘って巣穴を造るらしい。奇怪な習性だ。

【反響定位^{エコーロケーション}】で調べた結果、結構な数が中で眠っていたので、一網打尽にしてやる事にした。

【地形操作能力^{アースコントロール}】を使い、間欠泉のように勢いよく土を盛り上げ、タートルスネーク達を一匹残らず外に押し出す。そして天高く飛び上がったそれ等の首を、俺とダム美ちゃんと赤髪ショート、それに鬼人^{ロード}三名の総数六名で手分けして切り落としていく。高額で売れるらしい甲羅に傷がつかないよう、気を付けた。

鬼人の種族は【疾風鬼^{ゲイルホード}】と【灼熱鬼^{フレイムロード}】、そして最後の一人が【幻想鬼^{イリュージョンロード}】。

終わってから数えたところ、タートルスネークの数は八十八体。その中の三十八体は俺が殺していた。

赤髪ショートには『速すぎだ』と呆れられたが、鍛冶師さん達は『凄かった』と興奮しながら称賛してくれたので気分が良い。

また近接戦闘向きではない【幻想鬼】は首を刎ねるのにもたつきがちで、非力な人間である赤髪ショートの方が多く狩れていたのだが、まあこの話は獲物が蛇だけに、まさに蛇足である。

回収した甲羅を【異空間収納能力^{アイテムボックス}】に収納し、蛇肉は特製のタレでかば焼きにして喰う事に。

以前ナイトバイパーを狩った時はできなかった念願のかば焼きは、大層美味しかったです。エルフ酒との相性も抜群だった。また喰いたい。と言うか、絶対に喰ってやると心に決めた。

「能力名【殻^かに籠^{こも}る】のラーニング完了」

「能力名【休眠】のラーニング完了」

味は良かったが、得られたのは微妙なアビリティだった。甲羅は絶対に高額で売ってやる。

本当は空を舞っているハーピー達も喰いたかったが、人型を喰うところを見せるのは鍛冶師さん達の精神衛生上良くないと思い、いずれ彼女らの目が届かない時が来るまでおあずけにした。今は我慢である。

夕方前頃に寄り道はお終いにして、丘陵地を過ぎた先にある山道まで進む。

分体の働きによって既に丘陵地のマップも完成しているので、この辺りには特に心残りも無い。さて、山道にはどんなモンスターがいるのやら。

《九十八日目》

鍛冶師さん達によると、山道には主に、最も短いが非常に危険度の高い崖治いの道、危険度も距離も中くらいの普通の山道、最も安全だがその分長い川治いの道、という三つのルートがあるそうだ。そして俺が選んだのは、難易度の最も高い崖治いの道である。

何故なら、道が他よりも険しいのに加え、ハインドベアーのような周辺最強種が棲みついている

というからだ。

しかもボス系モンスターの個体まで生息しているらしく、その強さはレッドベアーを超えているとの事。これはぜひとも喰いたい、と思ったのだ。

この周辺の最強種は「四翼大鷲^{フアレスエーグル}」と呼ばれる、茶色い羽毛と四つの翼を持つ大型の鷲^{わし}だ。平均的な体長は二メートルほどもあり、その二倍を超える長さの四翼を広げて飛ぶ姿は、見る者を圧倒するそうだ。しかも厄介な事に、巨軀に見合わない飛行速度と回旋性能を持ち、鉤爪^{かぎめ}からは獲物をジワジワと弱らせる麻痺毒を分泌するのだという。

生息数こそ少ないが、崖沿いの道を進んでいると必ず襲ってくるらしい。

そしてそれ等を率いるボスが、翡翠色^{ひすい}の羽毛を持つ「四翼大鷲・亜種^{バリエント}」。

通常種より際立って大きく、神々のいずれか一柱から授けられた【加護】を持っている。その能力によって口から小さな竜巻を発生させたり、羽ばたきで生まれる風を、敵を切り刻む刃に変化させたりするそうだ。それに加え、配下を指揮するだけの知性もあるのだとか。

コイツが棲みついで以来、崖沿いの道を進むモノは殆どいなくなったとの事。

確かに厄介そうだ。レッドベアーは強かったが、あくまでも単体で動いていた。しかし今回は群れである。

崖沿いの道に入る前に、鍛冶師さん達から散々止めるよう説得されたが、俺は大丈夫と言って突

き進んだ。

案の定ファレーズエーグル達と遭遇した。確かに、その飛行速度はかなり速く、しかも死角の多い崖沿いの道から突然飛び出してくる。

しかし、【気配察知】を持つ俺からすれば、その出てきた瞬間こそが狙い目で、容易く糸で捕獲する事ができた。奇襲も、事前に分かかってしまえばかえって狙い撃ちし易いのだ。

そんな訳で、捕まえた総数十八体のファレーズエーグル達は、売れる素材を剥ぎ取り、残りをから揚げや焼き鳥などにして喰いまくった。

さっぱりとした肉は、なかなか美味^{うま}かった。

「能力名【混沌^{バニ}乱^ニを呼ぶ^ボ鳴き声^{ボイス}】のラーニング完了」

「能力名【羽毛生成】のラーニング完了」

「能力名【高速飛行の心得】のラーニング完了」

「能力名【風読み】のラーニング完了」

「能力名【麻痺爪】のラーニング完了」

「能力名【麻痺耐性^{トキシンス・レジスタンス}】のラーニング完了」

そんな感じで危なげなく進んでいると、昼には崖沿いの道の中で最も広い場所に出た。そこには色々な動物の骨が散らばっていて、道、というよりは何かの巣のようだ。よく見れば、人間の骨や武器の残骸も幾つか散らばっている。まるで、道に居座った猛獣を討伐しに来て返り討ちにあった名残りのような……

などと思っていると、上空から羽音がバサリバサリと響き、吹き荒れる突風が肌を打った。

【気配察知】で既に感知していたので特に驚く事も無く、俺は上空を見上げた。

そこにいたのは五体のファレーズエーグルを従えた、翡翠色の羽毛を持つボス——「ジャッドエーグル」だった。普通のファレーズエーグルの二倍以上はある体躯が力強く飛んでいる様は、存在感に満ち溢れていた。

レッドベアーよりも遥かに巨大で、発する威圧感も桁違いだ。

目が合う。チリチリとうなじの辺りに違和感を覚える。アチラは、コチラを確実に殺しにきていた。翡翠色の羽毛がまるで刃のように陽光を反射させて煌めき、金剛石のような嘴や鉤爪が、早く獲物の肉を斬りたいとばかりに、しきりに動いている。爪と爪が擦れ、異音とともに火花が散った。

俺を見下ろすその黄色い双眸からは、確かな知性を感じる。殺すのは勿体ない、と思わせるだけの気品がある。

しかし残念ながら、俺は初見の敵をできるだけ喰うようにしている。そしてジャッドエーグルは

亜種だ。喰えば、レッドベアーの時のように【加護】系のアビリティを得られるだろう。

まさに喰うべき相手だった。

赤髪ショート達の守りをダム美ちゃんと鬼人三名に任せ、俺は【鞘翅生成】を使って背中に虫のような翅を生やし、上空の敵に向かって飛翔した。ハルバードを、この手に握りしめて。

それから一時間ほど経過しただろうか。

流石に空は、ジャッドエーグルの領域だった。

四つの翼が生み出すその飛行速度と旋回能力は、まさに風のように。先ほど得たばかりの【高速飛行の心得】によって、余計にその凄さが理解できた。

空を縦横無尽に駆け巡るジャッドエーグルに、俺は翻弄された。奴が生み出す乱気流に揉まれて飛行は困難を極め、口から吐き出された小さな竜巻の槍によって何度も翅がもぎ取られる。更に巨大な麻痺爪に、各所の肉を抉られた。翡翠の羽毛は硬く鋭く、掠っただけで斬られてしまう。厄介極まりない。

俺の全身は血に染まり、肉と体液がとめどなく失われていく。

金剛の鉤爪で右腕を切り落とされ、左足も膝から下が食い千切られてしまった。しかも唾液に回

復讐の効果があらず、左足の傷口からは止まる事無く血が流れ落ち、筋肉を引き締めて無理やり出血を抑えるしかなかった。

幸い【激痛耐性】や【知覚鈍麻】のアビリティがあったので、ココまでの深手を負っても痛みに思考を割かれる事は無かったが、しかし、ジリジリと俺は追い詰められていった。

俺が体得した武術の数々も、空中では役に立たなかった。あくまでもアレは地に立つ人間が生み出し、受け継いできたモノだからだ。

とは言え、ただやられていた訳ではない。

ジャッドエーグルに付き従っていた五体のフアレーズエーグルは、全て斬り殺した。

ジャッドエーグルの右足もハルバードで切り落とし、四つの翼には幾つか風穴を開け、胴体にも深い切り傷をつけている。翡翠の体毛は、全身に負った細かい傷によって所々赤く染まっていた。

決して個の能力として負けている訳ではない。

だが、空が戦場である事が、実力以上の差を生み出していた。

荒れ狂う突風に晒されながら、不慣れな飛行と戦闘とを同時に行うのは難しく、精神に僅かながら乱れが生じ、飛行速度も明らかに衰えてきていた。もはやジャッドエーグルからすれば狙いやすいのでしかないだろう。

相手の攻撃は激しさを増し、ついには俺の手からハルバードが取り落とされる。運良く骸骨百足

の近くに落ちて刺さり、崖下に落下する事は免れたものの、即座に拾える場所でも無い。

こちらが武器を失ったのを好機と見たのか、ジャッドエーグルは大きく距離をとってから加速。

その金剛の嘴で俺を貫くつもりなのだろう、真つ直ぐ俺に向かって突っ込んできた。

それに伴い、まるで嵐のように風が吹き荒れる。

【加護】で生み出したと思いき突風に乘ったジャッドエーグルは、今までは比べ物にならない速度を叩き出した。真正銘の最高速度で突っ込んできているのだろう。

傷だらけの肉体でよくぞここまで、と思うほどのスピードだ。

地上に居る赤髪ショート達から悲鳴が上がる。

嘴に貫かれ、俺は空で果てるだろう。

ジャッドエーグルが自らの勝利を確信し、小さく嗤ったような気がした。

俺は、悔しそうに歯を食いしばる。

——という演出を試してみた。

いや、正確に言えば、ただ俺が使うアビリティを限定した結果がこうだったというだけである。

やはり、敵の領域で手加減したまま勝てるほど優しい相手ではなかったようだ。種族的にはオーガよりも遥かに強いから、当然と言えば当然かもしれないが。

今までは地力を上げる為の鍛錬だったが、ここから先は本気で殺しに行く事にした。

ジャッドエーグルが突っ込んでくるタイミングを見計らい、温存していた強力なアビリティの数々を発動させていく。

密かに回収していた血の滴る我が右腕を喰らって【補液復元】の発動条件を満たし、【高速再生】や【高速治癒】を重ねて全身の損傷を一瞬で治す。切り落とされた右腕も、食い千切られた左足も、即座に新しいモノが生えた。その分エネルギーを使って腹が空いたが、食料は目の前にあるので問題無い。

ついで【外骨格着装】を使い、赤いクワガタのような姿に変身した。この外骨格は防御力を高めるだけでなく、臂力を強化してくれる作用もある。それに加えて【黒鬼の強靱なる肉体】や【堅牢なる竜鱗鎧】などを重複発動させ、全身に竜鱗と膨大な筋肉を追加。

俺の変化を驚愕に染まった双眸で見つつ、尚止まらないジャッドエーグルを、指先から黄金糸を噴出してからめ捕る。更に【重力操作能力】を使ってジャッドエーグルの進行方向とは逆向きの重力を発生させ、強制的に失速させる。

身に纏う風の刃で黄金糸は幾らか斬られてしまったが、それでもまだかなりの量がからみついている。無形である重力にも抗えず、驚異的な速度は即座に失われていった。

もはや軌道変更ができなくなった敵の頭部に、両腕の拳を振り下ろす。

そこに技など無い。ただ単純に、力の限り両腕を振り下ろしただけである。しかしこれほど強化された臂力でそんな事をすればどうなるか。

ジャッドエーグルは、地面に高速で叩きつけられた。落ちた先に小規模なクレーターができるほどの衝撃。普通のファレーズエーグルなら四肢が千切れ飛んで絶命しているだろう。

しかしボス系モンスター特有の強靱な生命力によってか、ジャッドエーグルはギリギリ生きていた。とは言え『まだ死んでいないだけ』というところである。それでも十分凄いと思うが。

俺はハルバードを回収し、ジャッドエーグルの首を刎ねて戦闘に決着をつけた。

転がった頭部から宝石のような目玉を回収し、頭蓋骨と肉を喰らった。美味い。まるで生命力そのものが俺に流れ込んでくるような感じがする。

堪能した後、美しい羽毛が抜けないように気を付けながら、皮を剥ぎ取ったり肉を捌いたりと解体していく。そして心臓の辺りを切っていたところで、解体用ナイフから硬い感触が伝わってきた。感触から骨ではないと分かったので、不思議に思いながら探してみると、翡翠色をした一〇センチほどの丸石のようなモノを見つけた。

何だこれ？ と思い、【物品鑑定】を使ってみると、【翡翠鷲王の御霊石】というアイテムだと分かった。

鍛冶師さん達にコレ知ってる？ と聞こうとして振り返ると、既に【行商人】持ちの四名はすぐ

傍にいて、俺の手の中にある石を食い入るように見つめていた。

いつの間に近づいたんだ、と驚くほどの早業である。

気を取り直して説明してもらうと、【御霊石】系のアイテムは全て非常にレアな【伝説】級であり、【加護】を持ったボス系モンスターが百体に一体の確率で持っているそう。それもそのボス系モンスターが強ければ強いほど、【御霊石】の純度やレア度は上がるのだとか。

とは言え、ボス系モンスターはそう簡単に狩れる存在では無い。【加護】持ちという条件が加われば尚更だ。

かつてある国の軍隊が、【御霊石】を持っていると目されていた有名なボス系モンスターの討伐に赴いたところ、呆気なく全滅させられたという話もあるそう。

つまり【御霊石】は、狙って得られるようなアイテムではない。

実際、【御霊石】系のアイテムをオークションに出すと、中小国が買えるほどの金額になるらしい。尤も、大抵は売りに出される事無く、強力無比なマジックアイテムの製作に使われるそう。

へー、と思いながら喰うかどうか迷っていると、『まさかそれも食べるつもり？ 食べるより売りますよ』といった感じに、四人にジト目で見られた。なので一先ずは【異空間収納能力】に放り込む事にした。

根っこの部分はやっぱり商人である四人に、苦笑が漏れる。

これを得られたのは【幸運】と【黄金律】のお陰だろうから、このアビリティをくれたエルフとリターナには感謝しておこう。

その後翡翠の羽毛付きの皮を羽織った状態で【外骨格着装】を発動させてみた。すると、レッドベアー製の革鎧を取り込んだ時のように、二つ目となる新しい外骨格が精製・登録された。

全体的に翡翠と黒を基調とした独特の光沢がある外骨格で、背中には翡翠の四つの翼があり、どこなく鳥類を彷彿させた。所々にやや鋭い突起があり、四肢には金剛の鉤爪が取り付けられている。鉤爪は意思によって収納できるので便利そう。

試しに飛んでみると、翅よりも速く飛行する事が可能だった。翼を動かせば突風が自動的に発生して、飛行速度が底上げされる。

試しに翅も生やしてみると、更に高速で飛べた。これは嬉しい誤算である。

空中戦時には大活躍してくれそうだと思いつつ、今度は肉を喰う。

感想。頭部を喰った時にも思ったが、多分、今までで一、二を争う美味さだ。

思わずウマイ!! と叫んでいたほどである。

「能力名【矢羽根】のラーニング完了」

「能力名【天空の捕食者】のラーニング完了」



「能力名【嵐の神の加護】のラーニング完了」

「能力名【風塵完全耐性】のラーニング完了」

「能力名【金剛瞬爪】のラーニング完了」

「能力名【音速飛行】のラーニング完了」

アビリティも良さそうなのが多く、今回の成果は非常に大きかった。

ついでに冒険者達の骸むくろから何か得られないかなー、と漁あさってみたら、まだ使える「収納のバック」が五つほどあった。中身を拝見させてもらうと結構な額の金と武器、更に薬品もあったので、ありがたく頂く。他にも使えそうなアイテムは粗方回収した。

その代償として、骸を一ヶ所に集めて火葬してやった。

南無。

黙祷もくとうを捧げた後、俺達は再び歩みを進めた。ただ、鬼人三名が酷く複雑な感情を込めた視線を向けてくるのが気になった。

化物を見るような、それと同時に憧れの人を見るような、そんな感じの視線である。

《九十九日目》

今日は朝から豪雨だった。

幸い昨日の内に街道まで到着していたので、街道上にある「休憩所」と呼ばれる一辺が三〇メートルほどもあるデカイ平屋で雨風を凌いでいる。骸骨百足は馬車専用の建物の中だ。

先客の行商人の一团やら冒険者の集団やらが、俺が入った瞬間怯えたり殺気を放ったりしたので、取りあえず人間軍から略奪した酒樽を二つほど振舞ってみた。

それでも釣れなかった行商人には、ターゲットルスネークの甲羅や森で採れた素材、山道で見つけた冒険者の所持品などを売ったりして交流。

最初は恐る恐るだったが、鍛冶師さん達の存在もあって、次第に打ち解けていった。

後から休憩所に入ってきた奴等も俺の存在に驚いていたが、周囲の雰囲気から危険は無いと判断したのか、注意だけは向けつつも襲ってくる事は無かった。襲ってきたら喰ってやろうと思っていたので、ちよつと残念だ。

昼頃、姉妹さんや他の【職業・料理人】持ちと一緒に昼食を作り、それを喰い終わった後、行商人達に誘われて賭博に参加してみた。

ブラックジャックに似た、カードを使ったゲームらしい。簡単な説明をもらってから、昨日山道で手に入れた金を賭けてやってみる。

結果、ボロ勝ちだった。

これもきつと【幸運】と【黄金律】のお陰だろう。他の参加者が素っ裸になるまで剥ぎ取ってしまった。中には商品まで俺に持っていかれたギャンブラーな商人も居た。

ワハハハと勝ち誇った後、衣服を返してやり、商品も欲しいモノ以外は返してやった。

むさい男達の素っ裸を見ても嬉しくないし、多少イカサマしているような罪悪感があったからだ。それに商品まで賭けた商人はそこそこ大きな商会のメンバーらしかったので、貸しを作っておこうと思ったのである。

仲良くなった奴等には、傭兵団の宣伝も兼ねて「名鉄」を配っている。まあ、そこその成果ではないだろうか。

この日は雨が止まず、休憩所で一日を過ごした。

骸骨百足には屋根を取り付けてあるので進めない事も無かったが、急ぐ旅でもない。休憩所の一角にある訓練所にてダム美ちゃんと赤髪ショート、それに鬼人三名と組み手をして時間を潰した。ダム美ちゃんや赤髪ショートは、自分に合った戦闘スタイルを見つけているからそれを伸ばして

いけばいい。しかし鬼人三名は、まだまだ持つて生まれた身体能力で無理やり押し切ろうとしている部分がある。

取りあえず足癖の悪い【疾風鬼】^{ゲイルロスト}の風鬼さんにはサブットを、肉弾戦を好む【灼熱鬼】^{フレインロード}の熱鬼くんにはムエタイを、近接戦が苦手な【幻想鬼】^{イリュシエロード}の鬼鬼くんには柔術を教えてみる。

転生前の世界で、俺は特殊な装置を使って様々な術技を脳に直接刷り込んでいた。それは転生後も全て覚えていたし、実際に愛用した技も多く、教えるのに苦労はしなかった。

組み手をしばらくしていると、遠くで見学していた冒険者の数名が交ざりたいと言ってきたので、軽く手合わせを試みた。

【拳士】^{クワンシー}よりも【剣士】^{ソードマン}や【戦士】^{ウォリアー}が多かった為、予め作ってあった木刀や木槍などを「収納のバックパック」から取り出す……と見せかけてアビリティ【異空間収納能力】^{アイテムボックス}から引き出して渡した。

そこそこ手加減してみたが、それほど強いモノもおらず、あまり手応えは無かった。

それでもいい運動になったし、かなり打ち解ける事ができたので良しとしておこう。

それにしても、外を調査させていた分体が数体何処かに行ってしまったのは何故だろうか？

いやいや全く、さっぱり分からんなあ？

《百目》

昨日一日中降り注いだ雨は上がり、現在はぬかるんだ街道を再び進行中。ただし、新たなメンバーが加わっている。

休憩所で仲良くなったファルメール商会・防衛都市《トリエント》支部副店長一行と、その護衛をしている冒険者の集団である。

副店長について分かり易く言うと、小太りで禿頭の中年男性で、昨日の賭博の際、商品を俺に持っていた人だ。根っからのギャンブラーで、時たま昨日のように商品までも担保にしようのだそう。

そんなんで副店長が務まるのかと疑問に思ったが、部下の店員によればそれさえなければ文句無し of 逸材なのだという。実際、現店長よりも能力は上なんだそう。

おいおいそれでいいのかよ、と思ったが、まあ悪人ではないし俺には関係無いのでどうでもいい。彼等の乗る幌馬車^{ほろばしや}は骸骨百足と違って時々休憩が必要なので、移動速度は遅くなった。だが、その間にこの世界の情勢を色々と聞き出せたし、それはそれで有益な一時^{ひととき}だった。

その中で、俺達の森に人間軍が攻め込むきっかけとなった例の王女様の話になった。それによると、王女様の病気は、次期皇帝が持ち帰った秘薬で無事治った、という事だった。

これは、「グリシンド病」が治った初めての事例となる。数滴残った秘薬を、帝国と王国が分析している、という噂もあるそうだ。

実際には、秘薬は一滴残らず自然発火するよう細工しておいたのだが、それは黙っておいた。ちなみに、国家間の情勢が不安定になってきていて、近々戦があるのではないかと方々で囁かれているらしい。そんな状況だから、森に再び手を出す余裕も無いだろうという事だった。

今日は何事も無いまま、日が暮れた。

《百一日目》

昼頃、防衛都市《トリエント》に到着した。街をグルリと囲む白壁は堅牢^{けんろう}そう、様々な防衛機構が組み込まれている。ここを落とすのはかなり面倒だろう。

などと考えていたら、オーガである俺が現れた事で、かなりの騒ぎとなった。いや、鬼熊^{オニグマ}やオルトロスにボルフォルがいるのも要因ではあるか。

街に入れないかもしれない、というくらいにまで面倒な事態になりそうだったが、同行してきた副店長が何とかしてくれた。この街ではファルメール商会の影響力がかなり強いようだ。

彼には感謝である。ただそれと引き換えに、タートルスネークの甲羅などを格安で売るように交渉されたけどな。

取りあえず、街中では全身をフード付きコートで隠す事にした。オーガの巨軀までを隠せる訳ではないのでまだ目立つが、多少はマシなはず。

街の中には人間が多かったが、獣人などの亜人種も見受けられた。割合としては、人間が六に亜人種が四といったところだろうか。

メインストリートには商店が立ち並び、客引きの声が響いて活気に満ちていた。きっと色々と暗部はあるだろうが、楽しめそうな街だった。

街に入っただ後は色々と買い物したり、宿を探したりと、なかなか忙しい一日だった。

赤髪ショート達には『四、五日ほど滞在するから、その間に今後も俺と共に来るか、それともこの街に留まるか決めておくように』と言っておく。

俺としては彼女達を放したくないが、やはり意思を尊重すべきだろう。

《百二日目》

今日は赤髪ショートに案内されて、ダム美ちゃんと共に《総合統括機関^{ギルド}》の施設に赴いた。

鍛冶師さん達は傭人^{ロイド}三名をボディガードとして街を散策中だ。拠点で造っていたナイフや魔法薬などを売って明日の買い物資金を得るのだという。流石は行商人^{ササガ}、金策は馴れたものだ。

《総合統括機関》はかなり大きく、立派な施設だった。

外から見た限りでは三階建て。一階は酒場としても使われているようで、何人か酒を飲んでいる者の姿が見受けられた。

室内では邪魔になるので、フードを外して中に入った。俺の姿に驚いて剣を抜いた者もいたが、無視してカウンターに向かう。

それでも斬りかかってきた輩は、正当防衛として鎮めていく。ココで殺しは不味いので、殴って気絶させるに止めた。骨の折れる感触があったが、それは不可抗力だ。

歩み寄るにつれ受付嬢は顔面蒼白になっていったが、取りあえず今ある依頼はどんなものか聞いてみる。近くの板に依頼状が貼られていたが、やはり直接説明してくれた方が分かり易い。

しかし答えは返ってこなかった。どうやら椅子に座った状態で気絶してしまったらしい。

仕方なくその隣に居た不可思議な雰囲気のある老人に聞いてみると、カウンターにドサリと分厚い書物を出された。コレに依頼の詳細が書いてあるらしく、老人はそれを読み上げていく。分からない部分はその都度説明してもらった。

そしてその中から手持ちの品で条件がクリアされるモノ——ボルフオルの角の納品など——を選び、冒険者として既に登録済みの赤髪ショートが依頼を受ける形を取り、報酬を貰っていく。ココに来たのは、このように情報と金が同時に手に入るからだ。

依頼の中には、赤髪ショートの階級では受けられないモノもあったが、実際にクリア条件になっている品を取り出すと、特別に承認してもらえた。話の分かる爺さんである。

その結果、赤髪ショートの階級は一つ上昇。現在の實力とは釣り合っている、問題は無いだろう。

色々と老人に話を聞いてから、ギルドを出る。

後で知ったのだが、俺が話していた老人はどうもギルドの責任者——通称ギルド長だったようだ。なんであんなところに居たのだろうか。不思議である。

その後、錬金術師さん達と合流し、買い物に付き合った。つくづく思うが、何故女性の買物物はあるにも長いのだろう。どの世界でもこれは共通らしい。

かなり疲れた。

途中、俺を追跡している輩が居たので、路地裏に引き込んで撃退してやった。気絶させて身包みを剥いで素っ裸にし、その辺に吊るしておく。

全く、都市に来て早々何だと言うのだ。

宿に帰って軽く訓練をし、寝た。

《百三日目》

早朝、宿の近くにある空き地にて訓練した後、俺だけ単独で街を放浪する事にした。

ダム美ちゃんが鍛冶師さん達と一緒に服を見に行くと言っていたので、熱鬼くんや幻鬼くんには彼女達の荷物持ちという生贄^{いけにえ}になつてもらおう。風鬼さんは鬼人^{ロイド}三人の中で唯一の女性体なので、むしろダム美ちゃん達と一緒に買い物を楽しむだろう。

尊き二人の犠牲に、敬礼。

俺は、今回は目立たないよう【変身^{シェイプシフト}】と【形態変化^{メタモルフォーゼ}】を使い、前世の身体に似せた人間体となっている。

ふらふらと放浪しつつ、街の情報を収集していく。やはりと言うか当然と言うか、俺の噂は既に結構広がっていた。

基本的に大鬼^{オウガ}は周囲の生物にとつて危険な【大勢^{モーション}に害なすモノ^{スガ}】として知られている。知能が高いオウガ・メイジなどの中には、人間に害をなさない個体も稀^{まれ}にいるが、概ね危険な種族^{おおむ}として認知されている。門での騒ぎもそれに起因していた。

ただのオウガの割に知性的という、良く分からない存在である俺への反応は様々だが、恐ろしいとか、怖いかといった傾向がやはり強かった。まあ、そんなモノだろう。

三時間ほど表通りを歩いて適当な店で昼食をとった後、路地裏を歩く。
そこそこ身なりの良い装備にしているので、ゴロツキが釣れないかなー、と思つての行動だ。

結果、釣れた。ナイフや鉈^{なた}に似た刃物で武装したゴロツキが六名。ゲヘへ、とこれまた典型的な下種^{げす}な笑いを見せる奴等だ。

周囲に人気^{ひとけ}も無かったので、問答無用で叩き伏せる。

ただ、本来よりも小さい人間体であつた事を失念していた為に距離感が狂つてしまい、その隙を突かれて最後の一人にナイフで心臓を刺されてしまった。

とは言え、姿は人間でも中身はオウガだ。多少の痛みこそあれど大したダメージではなかった。徐^{おもむ}にナイフを引き抜くと、酷^{ひど}く驚かれた。まあ、いい。そいつの首の骨も捻^{ひね}り碎き、全員の死体を喰う。【気配察知】で周囲には誰もいないと分かっているが、誰が来てもいいようにさっさと喰つた。

「能力名【職業・盗賊^{シーフ}】のラーニング完了」

「能力名【静寂^{サイレント}の突き^{スタフ}】のラーニング完了」

「能力名【逃煙玉^{エスケイプボム}】のラーニング完了」

この六名は盗賊だったようだ。共通の紋様が刻まれた指輪を嵌めていたので、同じ組織に所属していた可能性が高い。こんな特注品を持っているという事は、もしかしたら結構大きな組織の構成員だったのかもしれない。

価値のある所持品は回収し、残りは食べ残した死体ごと酸性に変化させた体液で溶かして、殺人の痕跡を隠蔽。

再びゴロツキが釣れるのを期待しながら路地裏を歩いていると、五人の男達と一人の少年が激しく言い争う場面に出くわした。

五人の男達の平均的な年齢は二十代後半くらいだ。刀傷のついた強面が多く、一般人なら関わりたくない類の職業に就いていそう。鉄の臭いや仕草で、懐に刃物を仕込んでいるのが分かる。

それらと真正面から言い争っている少年は十三、四歳くらいだろうか。薄暗い路地裏の僅かな光でも燦然と輝く金髪と端正な顔立ちが、将来はすぐぶる美男子になるだろうと予感させる。

白銀の軽甲冑を着け、赤いマントを羽織り、腰には剣があるので、騎士見習い、もしかしたら騎士なのかもしれない。武装の品から、そこそこの家の子ではないかと推察できた。

隠れて話を聞いていると、どうやら誘拐がうんたらかんたら、という話だった。騎士の少年は今にも抜剣しそうな勢いで、男達から情報を聞き出そうと躍起になっている。

別に興味も無かったので帰ろうとした時、男達の指に先ほど俺が喰った盗賊連中と同じモノが嵌

められているのに気が付いた。

取りあえず最後まで見てみるかと思いついた途端、乱闘が始まった。

個人としては少年の方が強かったようで、容易く押し潰されはしなかったのだが、最終的には数の差で取り押さえられてしまった。

馬乗りになった男の握るナイフが少年の胸を突き刺す寸前、俺は割って入った。

五人の男達を気絶させてから分体を寄生、こいつらのアジトの調査に使う。

ボロボロになった少年を担いで、そこから立ち去る。後々少年が男達を殺したり、捕まえたりしないようにする為だ。

だいぶ離れたところで、少年の怪我を有料で治してやった。『何故あの男達を逃がした』と少年には怒鳴られたが、命の恩人になんだその態度は、と鉄拳制裁。それから、しばし休んだらコレを誰にも悟られぬように使え、と『名鉄』を渡す。『お前は何者だ』と聞かれたので、『ただの傭兵だ』と答えて帰った。

少年は美形だったが、所詮男なのだからこんな扱いで十分だろう。

《百四日目》

まだ闇に包まれた街中を、俺はオーガの姿で移動していた。その傍らにはダム美ちゃんや幻鬼く

んに加え、昨日助けた少年騎士の姿がある。

昨日俺が宿に帰ってすぐ、少年に渡した『名鉄』から連絡があった。

宿の場所を教えると、即座に少年はやってきた。『本当に傭兵か』と聞かれたので『本当に傭兵だ』と答えると、『では依頼したい』と言われた。

依頼内容は、少年が仕えるお転婆姫の救出だそうだ。

なんでも、お忍びで《トリエント》まで来ていたのだが、お転婆姫はお供の隙について宿を抜け出してしまい、案の定ヒト攫いの組織に拉致されたそうだ。

身代金を要求する手紙が送られてきたので、少年が護衛団の代表として指定された場所に行ったところ、そこに居たのは六名の下っ端だけ。俺が見た時より一人多いのは、先に身代金を持ち帰った奴が居た為だ。

言い争っていたのは、姫を解放しないどころか、金を更に請求されたからだそうだ。

そんな微妙な状況で男達を叩きのめしては不味かったかもしれないが、先に手を出して事を荒らげたのは少年の方だ。それに分体を寄生済みの男達には、予定通りに進めるよう仲間に伝えさせてある。話がこじれている心配は無い。

これから闇に紛れて、組織のアジトを襲撃する。分体のおかげで内部情報は筒抜けだ。

足手まといにしかならないから、姫の護衛団メンバーには何も知らせていない。少年は今回の雇

い主であり、ついに行きたいと言うので仕方なくだ。

護衛団同様に何も知らない赤髪ショート達も宿で寝ている。必要無いとは思うがボディガードは風鬼さんや熱鬼さんに任せてきた。こっちは少年を除いた三人でも十分事足りるので問題無し。

目的地である、今は人の住んでいない元貴族の屋敷に到着すると同時に、少年には分からないように密かにブラックスケルトン・アサシンを生成。敷地内に十体ほど放ち、敵の取りこぼしが無いように周囲を警戒させる。

そうして俺達は敵のアジトに侵入した。

結果だけを言うと、朝日が昇る前に組織は壊滅した。

まず酒を飲んで寝ていた盗賊団のリーダーを暗殺し、その他もあつという間に殺し尽くして決着がついた。見逃しは一切無し。そういう依頼だったからだ。

お転婆姫も無事救出できた。予想に反して、線が細いというか、触れれば壊れてしまいそうなほど儂げな少女だった。歳は十二歳といったところだろうか。白金に輝く髪は美しく、将来は美人になるだろうなと思わせる端正な顔立ちだった。

四肢には鉄の拘束具が嵌められ、声が出せないように口を塞がれていたが、幸い薬で眠らされていただけで、服の乱れも暴力の痕も無かった。少年も護衛団も、一先ず首を刎ねられずに済むだろう。

ついでに溜め込んでいた財宝や、王国の暗部に関わる書類を少年に隠れて回収しておく。また一つ、いざという時の為のネタができた。というか、書類を見る限り今回の誘拐は計画的なモノだったらしいのだが、そこまで深く関わるつもりは無いので目を瞑こらっておこう。下手に手を出せば無用な争いに巻き込まれかねない。

俺は、何も見ていない。

少年は、何も知らない。

むしろ、そもそも誘拐など初めから無かった。

コレでいこう。

少年に『全ては王女様が計画した悪戯いたづらだった。そして自分は仕方なくそれに協力していた』と護衛団に報告しろ、と言い含める。

王女誘拐なんて事実はもみ消した方が無難そうだ。大事おおいとにして厳しい罰を与えられるより、お転婆姫の悪戯に振り回された、という事にした方がまだマシだろうよ。

お転婆姫の武勇伝の数々を少年から聞いた限りでは、そんな報告でも十分信じてもらえるのではないかと思うのだ。

しかし少年は、国王には全て伝えるべきである、と頑として聞き入れてくれなかったので、幻鬼くんの催眠術で無理やり納得させた。ついでに、お転婆姫にも口裏を合わせるように言っておけ、

とも。

全く、真っ直ぐ過ぎるのも考えモノだ。俺の迷惑となる事はして欲しくない。

催眠によって一時的に少年の意識が混濁している間に、組織の構成員を喰くつてみた。

「能力名【足止める蜘蛛ス・バイダー・ウエブの糸】のラーニング完了」

「能力名【毒煙玉ポイズンボール】のラーニング完了」

「能力名【盗聴ワイヤタッピング】のラーニング完了」

「能力名【ヒト攫い】のラーニング完了」

まあまあな成果、といったところだ。

日が昇る前に、俺達はアジトから撤退した。

屋敷からは、轟々と炎が立ち上っている。証拠隠滅、真実は灰燼かいじんに帰かえしたのだ。

その後は昼まで寝たり、少年が持ってきた報酬を受け取ったり、副店長との約束でファルメール商会の支店に顔を出しに行ったりして過ごした。

明日、この街を出立する。森の拠点で次代を担うゴブリンなどの子達が生まれたとの連絡があったので、一旦帰るのである。

鍛冶師さん達がどういった選択をするのか、若干不安だった。

《百五日目》

鍛冶師さん達はこれまで通り、俺についてきてくれるそうだ。

嬉しい事である。というか、『今更だ』と言われた。

昼前、荷物を纏めて街を出立……しようとして、邪魔が入った。

騎士の少年と、小さなお転婆姫の二人が、宿を出たところで待ち構えていたのである。

昨日は言葉を交わす事無く別れたお転婆姫からは一応、助けた事への感謝を告げられた。

可愛らしい外見からは想像し難い、やけに年寄り臭い口調ではあったが、それは、まあいい。人の口調をとにかく言うつもりはない。むしろオーガである俺を恐れる事無くしつかりと話す様は、

やはり王族の貫録があった。図太い、と言ってもいいかもしれん。

が、少年の困ったような表情を見て、面倒事の予感がした。

案の定、お転婆姫は、まさに王が下民に命令するように、シュテルンベルト王国の王都《オウスヴェル》までの護衛を俺達に依頼してきた。

つい従ってしまいそうになる不可思議な魅力の声音だったが、それに吞まれる事無く、護衛団がいるだろう、と言ってみる。すると、『アヤツ等はつまらん、お主と居た方が面白そうだ』と返し

てきた。お転婆過ぎる。周囲の迷惑を考えろ、と思わず説教してしまったほどだ。

しかしお転婆姫は、『我にそのようなモノ言いをするのはお主が初めてぞ』と愉快そうに笑うだけで、こちらの話を聞いていない。少年を見ると、仕方なさそうに苦笑していた。

一先ず護衛の報酬を聞くと、金板一枚——つまり百万ゴールドだそうだ。

赤髪ショートによれば、普通の行商人の護衛は(ギルドが仲介するので幾分か手取りは減るとは言え)ココから王都までなら銀板一枚——つまり一万ゴールドの報酬が基本なのだという。

一ゴールドが十円と勝手に解釈しているので、普通は十万円、今回は一千万円といった感じか。食料費とかも込みの金額なのだろうが、取りあえずアホかと。血税を何だと思っているのだと言いたい気分である。無駄に使うんじゃないと。

とは言え、とは言えだ。王族という事を考慮に入れば、リスクと報酬は釣り合っている気がしないでもないし、王都《オウスヴェル》に行くのも悪い話ではない。

街に来了目的は達成済みだから一旦拠点に戻ろうか、と思っていた程度である。絶対に戻らねばならないという状況でも無い。拠点には分体もいるし、生まれた子らの教育にも問題は無いだろう。別にココで依頼を受けてもいいのではないか？

結局、そんな軽い気持ちで引き受けたのだが、待ち合わせ場所を門の外に指定された時点で、この依頼の危うさに気が付くべきだった。